

学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者 山本ちか

論文題目

青年期の全体的自己価値に関する発達的研究

(論文内容の要旨)

第1章 研究の背景と本研究の目的

自我・自己は青年期における主要な課題である。日本の教育政策において、中学校、高等学校の生徒の自尊感情や自己肯定感が課題とされ、自己肯定感を向上させるための取り組みが検討されている（文部科学省，2017 など）。本研究は、青年期の全体的自己価値の様相を捉え、心理学的な視点から青年期の自己肯定感に関する教育政策に提言を行うことが目的である。第1章では、全体的自己価値の定義、日本の教育政策（第1節）、青年期の全体的自己価値の変化についてのこれまでの研究（第2節）、青年期の全体的自己価値に影響を与える要因についてのこれまでの研究（第3節）について概説し、本研究の目的（第4節）、本論文の構成（第5節）について述べた。

Harter(1988)は、青年の自己評価を測定する尺度の1つとして「global self-worth（以下、全体的自己価値とする）」を用いており、全体的自己価値を、人としての価値の全体的な判断であり、自分のことが好きであるのかの程度、全体的に自分自身に満足しているのかの程度としている。本研究では、全体的自己価値を、自分のことが好きであるのか、自分に満足しているのかといった自分自身全体について肯定的に評価しているのか、それとも否定的に評価しているのかの程度とする。自己の評価に関する指標として、「自尊感情」が用いられることが多い。また教育政策上は、「自己肯定感」が用いられることが多い。それぞれの定義および測定項目をみると、全体的自己価値とほぼ同義の内容といえる。そこで本研究では、全体的自己価値と自尊感情、自己肯定感をほぼ同じ概念と考え、日本の教育政策、青年期の全体的自己価値や自尊感情の変化についてのこれまでの研究をまとめた。

日本の教育政策において、自己肯定感の育成、つまり全体的自己価値、自尊感情の育成は、重要な課題と位置づけられている（文部科学省，2017，2018）。自己肯定感を育成するための施策を検討する上で、日本の青年の全体的自己価値の特徴を検討し、どのような要因が全体的自己価値、自己肯定感に影響を与えるのかを検討することが必要であるだろう。

従来青年期は、疾風怒濤の時期であると表現されるように、緊張と葛藤に満ち、ストレスの多い時期であると考えられてきた。自分自身全体に対する評価である全体的自己価値も例外ではなく、青年期は自己像が大きく変化する時期であり、全体的自己価値や自尊感情が著しく低下するなど、自己が不安定で動揺する時

期であると言われてきた。しかし近年の青年期の全体的自己価値・自尊感情の変化に関する多くの研究では、青年期の間にネガティブに評価するようになるという研究結果もあれば、ポジティブに評価するようになるという結果もみられ、結果が一貫していない。

そこで本研究では、青年は自分自身について肯定的に評価しているのか、それとも否定的に評価しているのか、どのような変化を示すのか青年期の全体的自己価値の様相について検討する。特に自己の動揺がみられると考えられる初期青年期に相当する中学生に焦点をあてて、横断データのみならず縦断データも用いて全体的自己価値の発達的变化の様相を検討する（第2章）。全体的自己価値は自分自身全体に対する評価であるが、自己を評価する指標としては青年にとって重要と考えられる具体的側面における自己評価もある。本研究では、具体的な側面として、中学生にとって重要であると思われる「身体的外見」、「スポーツ能力」、「知的能力」の自己評価を取り上げ、全体的自己価値との関連を検討する。

初期青年期の全体的自己価値の程度および変化にはどのような要因が影響しているのだろうか。DuBois & Hirsch (2000) は、発達の地位、主要な文脈、適応、個人の特徴、社会文化的背景が青年期の自己システムに影響を与えるモデルを提案している。本研究では、DuBois & Hirsch (2000) のモデルに基づき、主要な文脈として家族と友だちの文脈を取り上げ、初期青年期の全体的自己価値に与える影響を検討する（第3章、第4章）。また適応の行動的側面として問題行動と向社会的行動を取り上げ、全体的自己価値と適応との双方向的な関連について検討する（第5章）。

全体的自己価値の変化には個人差がみられることが指摘されている（加藤・太田・松下・三井，2018 など）。本研究では個人の変化にも焦点をあて、全体的自己価値の変化にはどのような軌跡パターンがあるのか、特に一貫して全体的自己価値が低い、あるいは一貫して低い中学生にはどのような特徴があるのかを検討する（第6章）。

自己が動揺すると考えられる初期青年期に相当する中学生だけではなく、青年中期に相当する高校生、青年後期に相当する大学生について検討することで、青年期を通じた全体的自己価値の様相を検討する（第7章）。高校生の全体的自己価値について日本の高校生と台湾の高校生を比較することにより日本の青年の全体的自己価値の特徴を検討する（第8章）。

以上の検討により青年期の全体的自己価値の発達的变化の様相について明らかにし、心理学的な視点から自己肯定感についての教育政策への提言を行うこととした。

第2章 中学生の全体的自己価値の発達的变化の様相

本章では、初期青年期に相当する中学生の全体的自己価値に焦点をあてて、横断データと縦断データの両方を用いて、初期青年期の全体的自己価値の発達的变化の様相を検討した。

第1節 全体的自己価値と具体的側面の自己評価の基礎的分析

1. 目的

全体的自己価値および具体的側面の自己評価について、歪度と尖度、構成概念妥当性、内的整合性による信頼性を検討することを目的とした。

2. 方法

調査は、2002年9月中旬から下旬に愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して行った。分析は、すべての項目に回答のあった愛知県の中学生2,151名、福島県の中学生1,789名について行った。調査内容は、全体的自己価値と具体的側面の自己評価であった。全体的自己価値は、自分に満足しているかなど自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。具体的側面の自己評価は、身体的外見、スポーツ能力、知的能力の各側面をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

主成分分析の結果、全体的自己価値の一次元性が確認された。また Cronbach の α 係数は横断調査と縦断調査のいずれも十分な値が得られており、内的整合性があると考えられる。具体的側面の自己評価については、確証的因子分析の結果、事前に想定していた3因子が確認され、構成概念妥当性が確認された。

第2節 横断研究による全体的自己価値の検討

1. 目的

中学1年から中学3年を対象として、全体的自己価値および身体的外見、スポーツ能力、知的能力の側面の自己評価に性差、学年差がみられるのかどうかについて分散分析を用いて、横断的に検討した。

2. 方法

調査は、2002年9月中旬から下旬に愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して行った。分析は、全体的自己価値と具体的側面の自己評価と性別のすべての項目に回答のあった愛知県の中学生2,151名、福島県の中学生1,789名について行った。調査内容は、第1節と同様であった。

3. 結果および考察

全体的自己価値と自己評価のすべての側面で性差がみられ、男子よりも女子の方が否定的に自分自身を評価していた。また全体的自己価値と身体的外見の自己評価、知的能力の自己評価では学年差がみられた。学年が上がるにつれて、自分自身をより否定的に評価するようになる可能性が示唆された。

第3節 縦断研究による全体的自己価値の検討

1. 目的

中学生の全体的自己価値と具体的側面の自己評価が中学1年から3年までの2年間にどのように変化するかを、成長曲線モデルを用いて縦断的に検討した。また全体的自己価値と具体的側面の自己評価の変化に

性別が影響しているのかを検討した。

2. 方法

調査は、愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して、5回行った。第1回は中学1年2学期(2002年9月)、第2回は中学2年1学期(2003年5月)、第3回は中学2年2学期(2003年9月)、第4回は中学3年1学期(2004年5月)、第5回は中学3年2学期(2004年9月)であった。分析は、5回の調査すべてに回答のあった愛知県の中学生183名、福島県の中学生99名について行った。調査内容は、第1節と同様であった。

3. 結果および考察

成長曲線モデルの検証の結果、全体的自己価値と具体的側面の自己評価は、自分自身に否定的に評価するように変化する傾向がみられた。また性別は切片に影響しているが、傾きには影響していなかった。全体的自己価値と具体的側面の自己評価の程度に性差はみられるが、その変化の仕方に性差はみられないこと、全体的自己価値の程度と変化には個人差がみられることが示唆された。

第4節 全体的自己価値と具体的側面の自己評価、具体的側面の重要度の関連

1. 目的

中学生の全体的自己価値に影響を与えているのは、具体的側面の自己評価であるのか、具体的側面の重要度であるのか、その関連について共分散構造分析を用いて検討した。

2. 方法

調査は、2002年5月下旬に愛知県内の9校の中学生に行った。分析は、すべての項目に回答のあった愛知県の中学生670名について行った。調査内容は、全体的自己価値、具体的側面の自己評価、具体的側面の重要度であった。全体的自己価値と具体的側面の自己評価は、第1節と同様の内容であった。具体的な側面の重要度は、各側面が自分にとってどれくらい重要であるのかを6段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

男女とも外見を重要だと感じていることが、外見の自己評価や全体的自己価値に否定的に関連し、否定的な自己評価が否定的な全体的自己価値に関連していた。知的能力は、女子は知的能力を重要視していることが肯定的な自己評価に関連し、肯定的な全体的自己価値に関連していることが示された。

第5節 本章のまとめと考察

第1節から第4節までの研究で得られた結果をまとめ、考察を行った。

第3章 家族関係が中学生の全体的自己価値に与える影響

本章では家族の文脈を取り上げ、中学生が知覚する親との関連、中学生とその親が知覚する家庭の雰囲気

との関連、中学生が知覚する両親の夫婦関係との関連、家庭の経済状況との関連から、家族関係が中学生の全体的自己価値に与える影響を検討した。

第1節 中学生が知覚する親との関係との関連

1. 目的

暖かさ、愛着、自律促進傾向、規制の強さといった親との関係について中学生がどのように知覚しているのかを取り上げ、青年が知覚した親との関係は、全体的自己価値にどのように影響を与えているのかを成長曲線モデルを用いて検討した。

2. 方法

調査は、愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に、3回行った。第1回は中学1年2学期(2002年9月)、第2回は中学2年2学期、第3回は中学3年2学期であった。分析はすべての時点で全項目に回答のあった愛知県の中学生292名について行った。調査内容は、全体的自己価値、親との関係の知覚であった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。親との関係の知覚は、中学生が知覚する親との関係について6段階評定でたずねた。因子分析の結果、「愛着」と「厳しき」の2つの下位尺度とした。

3. 結果および考察

成長曲線モデルでの検証の結果、青年が知覚した両親との関係は、「愛着」は全体的自己価値の程度に肯定に影響し、「厳しき」は全体的自己価値に否定的に影響しているが、親との関係の知覚の変化は全体的自己価値の変化の仕方に影響しないことが示唆された。

第2節 中学生およびその親が知覚する家庭の雰囲気との関連

1. 目的

「家庭の雰囲気」を取り上げ、全体的自己価値との関連について検討した。中学生が知覚した家庭の雰囲気および父母が知覚した家庭の雰囲気と中学生の全体的自己価値にはどのような関連がみられるのか、関連の仕方は時点で異なるのかを検討した。

2. 方法

調査実施時期は、第1回は中学2年2学期(2002年9月)、第2回は中学3年2学期であった。2時点で中学生と父母すべての回答があった215組を対象として分析を行った。調査内容は、全体的自己価値、中学生およびその親が知覚した家庭の雰囲気であった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。家庭の雰囲気は、自分の家庭の雰囲気をどのように感じているのかを、中学生、父親、母親それぞれに、4段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

家庭にあたたかくポジティブな雰囲気を感じているほど自分自身に肯定的であった。また父親が家庭をにぎやかなどポジティブに感じているほど全体的自己価値が高かった。しかし母親が家庭の雰囲気をどう感じているかと子どもの全体的自己価値は関連していないことが示唆された。

第3節 中学生が知覚する両親の夫婦関係との関連

1. 目的

中学生の全体的自己価値に影響を与える要因として「両親の夫婦関係」を取り上げ、中学生の知覚した両親の夫婦関係に、性差、学年差がみられるのかを検討した。また、中学生の知覚した両親の夫婦関係が、全体的自己価値にどのように影響しているのかを検討し、その影響の仕方は学年別、性別に違いがみられるのかを横断データを用いて検討した。

2. 方法

調査実施時期は、2002年9月であった。中学生・父親・母親がすべて回答し、全項目に回答のあった愛知県の中学生とその父母1,228組について分析を行った。調査内容は、全体的自己価値、中学生が知覚した両親の夫婦関係であった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。中学生が知覚した夫婦関係は、両親の夫婦関係をどのように知覚しているのかを4段階評定でたずねた。「仲の良さ」と「葛藤」からなる。

3. 結果および考察

分散分析の結果、夫婦関係の知覚の仕方に学年差はみられなかったが、全体的自己価値との関連の仕方は、学年によって異なっていた。中学2年生までは両親の夫婦関係が全体的自己価値にわずかではあるが影響するが、学年の上昇とともに、夫婦関係は影響しなくなることが示唆された。

第4節 家庭の経済状況との関連

1. 目的

全体的自己価値に影響を与える要因として経済状況を取り上げた。家庭の経済状況（年収）、実際の小遣いの額、中学生が自分の家庭は裕福であると思っているかどうかと全体的自己価値に関連しているのかを横断データを用いて、学年別、性別に検討した。

2. 方法

調査実施時期は、2002年9月であった。分析は、すべての項目に回答のあった2,708名について行った。調査内容は、全体的自己価値と複数の経済面の指標であった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。裕福さの知覚は、自分の家庭が裕福だと思っているかを4段階評定でたずねた。小遣いの額は1ヶ月の小遣いの額をたずねた。年収は母親に家庭の総年収をたずねた。

3. 結果および考察

実際の小遣いの額や実際の家庭の年収よりも、中学生が裕福であると感じているかどうかが全体的自己価値と関連していた。たとえ経済状況がよくない場合であっても、中学生自身が自分の家庭を裕福だと感じれば肯定的な自己像をもつことができる可能性が示唆された。

第5節 家の中での嫌なできごとと経験との関連

1. 目的

中学1年から中学3年までの「家の中で嫌なできごとがあったか」という嫌なできごと経験が、全体的自己価値の変化にどのように影響を与えているかについて成長曲線モデルを用いて検討した。

2. 方法

調査は、愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して、3回行った。第1回は中学1年2学期(2002年9月)、第2回は中学2年2学期、第3回は中学3年2学期であった。分析はすべての時点で全項目に回答のあった愛知県の中学生292名について行った。調査内容は、全体的自己価値、家の中での嫌なできごとであった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。嫌なできごとは、家の中で3ヶ月間にどれだけ嫌なできごとがあったかを4段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

家の中での嫌なできごとは全体的自己価値にネガティブに影響していた。成長曲線モデルの検証の結果、「嫌なできごと」の傾きから「全体的自己価値」の傾きへのパスが有意であり、家の中での嫌なできごとが増加するほど全体的自己価値が低下する傾向があることが示唆された。

第6節 本章のまとめと考察

第1節から第5節までの研究で得られた結果をまとめ、考察を行った。

第4章 友だち関係が中学生の全体的自己価値に与える影響

本章では、主要な文脈として友だち関係を取り上げ、友だち関係が全体的自己価値にどのように影響を与えているのかを検討した。友だちとの関係として、中学生が知覚する友だちとの関係、友だちとの嫌なできごと経験、ソーシャルサポートに焦点をあて、全体的自己価値との関連を検討した。

第1節 中学生が知覚する友だちとの関係との関連

1. 目的

安心感、暖かさ、関係を心配する傾向といった友だちとの関係について中学生がどのように知覚しているのかを取り上げ、中学生が知覚した友だちとの関係は、全体的自己価値にどのように影響を与えているのかを成長曲線モデルを用いて検討することを目的とした。

2. 方法

調査は、愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して、3回行った。第1回は中学1年2学期(2002年9月)、第2回は中学2年2学期、第3回は中学3年2学期であった。分析はすべての時点で全項目に回答のあった愛知県の中学生431名について行った。調査内容は、全体的自己価値、中学生が知覚した友だち関係であった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。友だち関係の知覚は、中学生が知覚する友だちとの関係について6段階評定でたずねた。因子分析の結果、「愛着」と「関係への不安感」の2つの下位尺度とした。

3. 結果および考察

愛着の切片から全体的自己価値の傾きへの負のパスが有意であり、第1回調査で友だちへの愛着を知覚しているほど全体的自己価値が低下するといえる。また関係の不安感の変化が全体的自己価値の変化に影響しており、友だちとの関係の不安感が高まると全体的自己価値が低下する可能性が示唆された。

第2節 友だちとの嫌なできごとと経験との関連

1. 目的

「友だちについて嫌なできごとがあったか」という嫌なできごと経験が全体的自己価値の変化に影響を与えているかを、成長曲線モデルを用いて検討した。

2. 方法

調査は、愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して、3回行った。第1回は中学1年2学期(2002年9月)、第2回は中学2年2学期、第3回は中学3年2学期であった。分析は3時点すべての項目に回答のあった愛知県の中学生431名について行った。調査内容は、全体的自己価値、友だちとの嫌なできごとであった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。友だちとの嫌なできごとは3ヶ月間にどれだけ嫌なできごとがあったかを4段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

友だちについての嫌なできごとの切片から全体的自己価値の切片に負のパスがみられ、嫌なできごとを経験しているほど全体的自己価値が低いといえる。「嫌なできごとの変化」は全体的自己価値の変化に影響しており、友だち関係で嫌なできごとの経験が増えるほど、全体的自己価値が低下することが示唆された。

第3節 ソーシャルサポートとの関連

1. 目的

友だち関係での嫌なできごとの経験と全体的自己価値の関連の仕方が、ソーシャルサポートの違いによって異なるのかどうかを検討した。

2. 方法

調査は中学3年1学期(2004年5月)に実施した。分析はすべての項目に回答のあった愛知県の中学生

633名について行った。調査内容は、全体的自己価値、友だち関係での嫌なできごと、ソーシャルサポートであった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。嫌なできごと経験は、友だちについて3ヶ月間にどれだけ嫌なできごとがあったかを4段階評定でたずねた。ソーシャルサポートは、6段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

女子はソーシャルサポートの有無に関わらず、友だち関係での嫌なできごとが全体的自己価値と関連すると考えられる。一方男子は、ソーシャルサポートを知覚しているほど、全体的自己価値が高く、友だち関係で嫌なできごとの少なさが全体的自己価値の高さと関連する傾向が示唆された。

第4節 親との関係の知覚および友だちとの関係の知覚との複合的関連

1. 目的

「親との関係の知覚」、「友だちとの関係の知覚」が中学生の全体的自己価値とどのように関連しているのか、その関連の仕方が性別、学年別によってどのように異なるのかを検討し、全体的自己価値に与える文脈の影響を総合的に検討した。

2. 方法

調査実施時期は、2002年9月であった。分析は、すべての項目に回答のあった2,033名に行った。調査内容は、全体的自己価値、親との関係の知覚、友だちとの関係の知覚であった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。親との関係の知覚は、中学生が知覚する親との関係について6段階評定でたずねた。「愛着」と「厳しさ」からなる。友だち関係の知覚は、中学生が知覚する友だちとの関係について6段階評定でたずねた。「愛着」と「関係への不安感」からなる。

3. 結果および考察

友だちとの関係の不安感を知覚することは、中学1年から3年まですべての群において最も全体的自己価値に否定的に影響していることが示された。また友だちとの関係で愛着を知覚するよりも、親との関係で愛着を知覚することが、青年の全体的自己価値により影響を持っていることが示唆された。

第5節 本章のまとめと考察

第1節から第4節までの研究で得られた結果をまとめ、考察を行った。

第5章 中学生の全体的自己価値と適応の双方向的な影響

本章では、適応の行動的側面として問題行動と向社会的行動を取り上げ、全体的自己価値との双方向的な影響について検討した。

第1節 問題行動との双方向的関連

1. 目的

全体的自己価値が問題行動にどのように影響するのか、それとも問題行動が全体的自己価値に影響するのか双方向的な影響を、交差遅延効果モデル、同時効果モデル、成長曲線モデルから検討した。

2. 方法

調査は、愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して、3回行った。第1回は中学1年2学期(2002年9月)、第2回は中学2年2学期、第3回は中学3年2学期であった。分析はすべての時点ですべての項目に回答のあった愛知県の中学生435名について行った。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。問題行動については、規則違反や攻撃行動等の問題行動をこの3ヶ月間にどのくらい行ったかを4段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

成長曲線モデルで検証の結果、全体的自己価値が高いほど問題行動は少なく、問題行動が少ないほど全体的自己価値は高いという双方向的な関連があると考えられた。また全体的自己価値が問題行動の変化を予測するのではなく、問題行動が全体的自己価値の変化を予測する可能性が示唆された。

第2節 向社会的行動との双方向的関連

1. 目的

縦断データを用いて、中学生の向社会的行動と全体的自己価値の双方向的影響について検討した。向社会的行動と全体的自己価値の双方向的な影響を検討するモデルとして、交差遅延効果モデル、同時効果モデル、成長曲線モデルを用いて検証した。

2. 方法

調査は、愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して、3回行った。第1回は中学1年2学期(2002年9月)、第2回は中学2年2学期、第3回は中学3年2学期であった。分析はすべての時点ですべての項目に回答のあった愛知県の中学生347名について行った。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。向社会的行動については、日常生活場面で行う向社会的行動について、この3ヶ月にどれくらい行ったかを4段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

交差遅延効果モデルおよび同時効果モデルを検証した結果、女子は関連がみられず向社会的行動を行ったからといって全体的自己価値は高くはないと考えられる。一方男子は、向社会的行動を行うことによって自分自身に自信を持ち、全体的自己価値が高くなる可能性が示唆された。

第3節 本章のまとめと考察

第1節から第2節までの研究で得られた結果をまとめ、考察を行った。

第6章 中学生の全体的自己価値の変化の個人差

本章では、全体的自己価値の変化の個人差に焦点をあてた。中学1年から中学3年までの2年間の全体的自己価値の変化のパターンについて検討し、「一貫して全体的自己価値が高かった中学生」の特徴、「一貫して全体的自己価値が低かった中学生」の特徴について記述した。

第1節 全体的自己価値の変化の軌跡パターン

1. 目的

中学1年2学期、中学2年2学期、中学3年2学期の3時点の全体的自己価値を低群、中群、高群に分け、その組み合わせにより27パターンに分類し、2年間の全体的自己価値の変化のパターンを検討した。また混合軌跡モデルを用いて、全体的自己価値の軌跡パターンを検討した。

2. 方法

調査は愛知県内の9校の中学生に対して、3回行った。第1回は中学1年2学期（2002年9月）、第2回は中学2年2学期、第3回は中学3年2学期であった。分析はすべての調査に回答のあった愛知県の中学生374名について行った。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

混合軌跡モデルの検証結果から、全体的自己価値の軌跡は5パターンに分類され、多くの青年は、中学生の時点では自己を否定的に評価し、全体的自己価値は低下する軌跡であった。一方で、中学1年の時点から全体的自己価値は高く中学生の間自己を肯定的に評価し続けている中学生もいることが明らかとなった。

第2節 一貫して全体的自己価値が高い中学生の特徴

1. 目的

中学1年2学期から中学3年2学期までの5時点で「一貫して全体的自己価値が高かった中学生」を取り上げた。一貫して全体的自己価値が高かった中学生にはどのような特徴がみられるのか、問題行動や規則違反、向社会的行動、親や友だちとの共行動といった行動上の特徴を記述した。

2. 方法

調査は愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して、5回行った。第1回は中学1年2学期（2002年9月）、第2回は中学2年1学期、第3回は中学2年2学期、第4回は中学3年1学期、第5回は中学3年2学期であった。分析は5回の調査の全体的自己価値のすべての項目に回答のあった愛知県と福島県の中学生321名について行った。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。行動上の特徴は、問題行動、問題行動の予兆行動、向社会的行動、親や友だちとの共

行動について4段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

一貫して全体的自己価値が高かった中学生は、男子は12名、女子5名で男子に多くみられた。これらの中学生の行動上の特徴を見てみると、親か友だちのいずれかとの共行動、あるいは両方との共行動をより多く行っていること、特に男子は向社会的行動をより多く行っている傾向が示唆された。

第3節 一貫して全体的自己価値が低い中学生の特徴

1. 目的

中学1年2学期から中学3年2学期までの5時点で「一貫して全体的自己価値が低かった中学生」を取り上げた。一貫して全体的自己価値が低かった中学生にはどのような特徴がみられるのか、問題行動や規則違反、向社会的行動、親や友だちとの共行動といった行動上の特徴を記述した。

2. 方法

調査は、愛知県内の9校の中学生と福島県の5校の中学生に対して、5回行った。第1回は中学1年2学期(2002年9月)、第2回は中学2年1学期、第3回は中学2年2学期、第4回は中学3年1学期、第5回は中学3年2学期であった。分析は、5回の調査の全体的自己価値のすべての項目に回答のあった愛知県と福島県の中学生321名について行った。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。行動上の特徴については、問題行動、問題行動の予兆行動、向社会的行動、親や友だちとの共行動について、それぞれ4段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

男子は、中学1年時点の得点が低かった場合でも、その後は得点が低くない時期があり、一貫して得点が低かった者はいなかった。女子については、一貫して全体的自己価値が低かった中学生が6名おり、その多くは、問題行動あるいはその予兆となりうる規則違反をより多く行っていることが示唆された。

第4節 本章のまとめと考察

第1節から第3節までの研究で得られた結果をまとめ、考察を行った。

第7章 高校生および大学生の全体的自己価値の様相

本章では、自己が動揺すると考えられる初期青年期に相当する中学生だけではなく、青年中期に相当する高校生、青年後期に相当する大学生について検討し、青年期を通じた全体的自己価値の様相を検討した。

第1節 高校生の全体的自己価値の様相

1. 目的

青年中期に相当する高校生について、全体的自己価値の様相を検討することを目的とした。高校生の全体

的自己価値の程度を検討し、高校生の全体的自己価値に影響を与えているのは、具体的側面の自己評価であるのか、具体的側面の重要度であるのかを共分散構造分析を用いて検討した。

2. 方法

調査は2005年3月に実施した。分析はすべての項目に回答のあった627名について行った。調査内容は、全体的自己価値、具体的側面の自己評価、具体的側面の重要度であった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。具体的側面の自己評価は、身体的外見、スポーツ能力、知的能力、家族との関係、友だちとの関係についてどのように評価しているのかを6段階評定たずねた。具体的な側面の重要度は、各側面が自分にとってどれくらい重要であるのかを6段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

女子は全体的自己価値の得点が低く自分自身を否定的に評価していた。全体的自己価値に学年差はみられなかった。また、男女共に高校2年では「スポーツ能力」を重要視しているかどうか自己評価に影響し、そして全体的自己価値に影響しているが、高校1年ではこの関連はみられておらず、学年により全体的自己価値との関連の仕方に違いがみられた。

第2節 高校生の全体的自己価値のコホートの影響

1. 目的

全体的自己価値について2017年度に実施した調査と2018年度に実施した調査の結果を比較し、高校生の全体的自己価値のコホートによる相違を検討した。

2. 方法

2017年6月および2018年6月実施した。分析はすべての項目に回答のあった3校の高校生、2017年度1,877名、2018年度1,727名について行った。調査内容は、全体的自己価値であった。自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

高校生の全体的自己価値は、高校1年より2,3年で低下していた。また2017年度調査と2018年度調査では有意差はみられず、この2年のコホートによる相違はみられないと考えられる。

第3節 大学生の全体的自己価値の様相

1. 目的

青年後期に相当する大学生について、全体的自己価値の様相を検討した。大学生の全体的自己価値の程度を検討し、大学生の全体的自己価値に影響を与えているのは、具体的側面の自己評価であるのか、具体的側面の重要度であるのかを共分散構造分析を用いて検討した。

2. 方法

調査は、2006年12月に愛知県内の4校の学生に実施した。分析はすべての項目に回答のあった887名について行った。調査内容は、全体的自己価値、具体的側面の自己評価、具体的側面の重要度であった。全体的自己価値は、自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定でたずねた。具体的側面の自己評価は、身体的外見、スポーツ能力、知的能力についてどのように評価しているのかを6段階評定たずねた。具体的な側面の重要度は、各側面が自分にとってどれくらい重要であるのかを6段階評定でたずねた。

3. 結果および考察

全体的自己価値は、男子と比較して女子の得点が低く、自分自身を否定的に評価していた。全体的自己価値に学年差はみられなかった。大学生では、外見の自己評価だけではなく知的能力の自己評価も全体的自己価値と関連しており、大学3年では知的能力の自己評価が全体的自己価値と最も関連していた。

第4節 本章のまとめと考察

第1節から第3節までの研究で得られた結果をまとめ、考察を行った。

第8章 青年期の全体的自己価値の国際比較—台湾と日本の高校生の比較—

青年期の全体的自己価値の特徴は、日本特有のものであろうか。日本の高校生と台湾の高校生を比較することにより日本の青年の全体的自己価値の特徴を検討した。

第1節 台湾と日本の高校生の全体的自己価値及び具体的側面の自己評価の比較

1. 目的

高校生の自己評価について、全体的自己価値と、外見、スポーツ能力、知的能力といった具体的側面の自己評価から捉える。またこれらの具体的側面が自分にとってどれだけ重要であるかについても捉え、全体的自己価値、自己評価、重要度の点から、日本と台湾の高校生の自己の様相の相違について検討した。

2. 方法

調査は、2016年1月～2月に実施した。日本は愛知県内の私立高校、台湾は高雄市の公立高級中学と台中市の私立高級中学の生徒に依頼した。分析は、日本データは愛知県の私立高校生221名を対象に、台湾データは高雄市の公立高級中学と台中市の私立高級中学の508名を対象に行った。

3. 結果および考察

全体的自己価値、自己評価の各側面、いずれも日本より台湾の高校生の得点が高かった。日本の高校生の自己評価は低く、自己評価のあり方には文化差がみられることが示唆された。また重要度についても側面により文化差がみられることが示唆された。

第2節 具体的側面の重要度ごとの全体的自己価値、具体的側面の自己評価の比較

1. 目的

外見、スポーツ能力、知的能力の具体的側面が自分にとって重要であるかどうか（具体的側面の重要度）によって、「全体的自己価値」や「具体的側面の自己評価」の程度が異なるのかどうかを検討し、台湾の高校生と日本の高校生の自己のあり方の相違を検討した。

2. 方法

調査時期、調査対象者、調査内容は第1節と同様であった。

3. 結果および考察

日本の女子は各側面を重要しているかによって自己評価の程度に相違はみられないが、台湾では男女とも外見や知的能力を重要であると思っているほど全体的自己価値が低いなど、重要度による全体的自己価値の相違には文化差および性差がみられることが示唆された。

第3節 本章のまとめと考察

第1節と第2節の研究で得られた結果をまとめ、考察を行った。

第9章 総合考察

第1節 本研究で得られた結果のまとめ

本研究の結果明らかとなった青年期の全体的自己価値の様相について、①青年期の全体的自己価値の発達的变化および②全体的自己価値に影響を与える要因の点から考察した。青年期における全体的自己価値の様相には以下の特徴があるといえる。

青年期の全体的自己価値の発達的变化の全体的傾向は以下の通りである。①初期青年期に相当する中学生の全体的自己価値は低く、自分自身を否定的に評価しており、年齢が上がるに従って若干ではあるが低下し、自分自身をさらに否定的に評価するようになるという変化を示す。②青年中期に相当する高校生、青年後期に相当する大学生調査の結果も総合して考察すると、初期青年期には全体的自己価値は低下し、青年中期にかけてさらに低下し、青年中期から後期にはあまり変化せず、青年期の間全体的自己価値は低いままである。③青年期の全体的自己価値には性差があり、青年期の間中、女子は男子よりも否定的に評価している。④初期青年期には、全体的自己価値の程度には男女で差がみられるが、変化の仕方に性差がみられず、同じ傾きで低下する可能性がある。

また、青年期の全体的自己価値の変化の個人差については、以下の特徴があるといえる。①約半数の青年は、中学1年時点で全体的自己価値の得点が低く、自分自身を否定的に評価し続けたままである、②大部分の青年（91.6%）は、低下の程度は異なるが、全体的自己価値は低下している、③少数ではあるが、中学生の間、全体的自己価値が高いままの青年もみられる。

青年の全体的自己価値に影響を与える要因については、主に以下の特徴があるといえる。①初期青年期に

は家庭の文脈と仲間関係の文脈のどちらも全体的自己価値に影響を与えている。②家庭の文脈と仲間関係の文脈では、全体的自己価値への影響の仕方が異なっている。③家庭の文脈は、親と青年の関係だけではなく、家庭全体の雰囲気や夫婦関係など様々な家庭の要因が全体的自己価値に影響を与えている。

適応との関連では、主に以下の特徴があるといえる。①全体的自己価値と問題行動の関連は、一時的には全体的自己価値が高いほど問題行動は少なく、問題行動が少ないほど全体的自己価値は高いが、問題行動を行うことで全体的自己価値が向上する可能性もある。②男子では、全体的自己価値が高いと向社会的行動をより行うことができ、向社会的行動を行うことによって自分自身に自信を持ち全体的自己価値が高くなるという双方向的な関連がある。③一貫して低すぎる全体的自己価値は適応上の問題となる可能性がある。

第2節 教育政策への提言

本研究で得られた結果に基づき、①青年期の全体的自己価値の低下は問題であるのか、②全体的自己価値が特に低い青年への支援という視点から、青年期の自己肯定感に関する教育政策への提言を行った。

第3節 課題と展望

全体的自己価値の低下傾向、生涯発達の視点での研究の必要性、思春期的変化等の身体的要因を検討する必要性、全体的自己価値が高い青年の検討の必要性、高校生での多様な集団属性の検討することの必要性、欠損データの扱いについての課題を考察し、展望を述べた。

引用文献

Harter, S. (1988). *Manual of the self-perception profile for adolescents*. Denver, CO: University of Denver. (Unpublished manual).

DuBois, D. L. & Hirsch, B. J. (2000). Self-esteem in early adolescence: From stock character to marquee attraction. *Journal of Early Adolescence*, **20**, 5-11.

加藤 弘通・太田 正義・松下 真実子・三井 由里 (2018). 思春期になぜ自尊感情が下がるのか? ——批判的思考態度との関係から—— 青年心理学研究, **30**, 25-40.

文部科学省 (2017). 第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/02/06/1381849_01_1.pdf (最終閲覧日: 2022年5月3日)

文部科学省 (2018). 第3期教育振興基本計画について (答申)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/08/1402213_01_1.pdf (最終閲覧日: 2022年5月6日)